

保育施設における園庭改良と遊びの変容過程

Improvements in Playground Design and the Transformation of Play in Early Childhood Education Settings

清水 一巳

Kazumi SHIMIZU

本研究は、保育施設における園庭改良と、それによる遊びの変容過程について検討している。先行研究から、保育者と乳幼児の関係が、環境の変化と共に変化し、子どもが主体的に遊びを展開していくことの重要性を強調している。次に、園庭環境の構成において、多様な環境の再構築が子どもの成長を支えることを指摘している。

さらに、ひまわり畑の設置による自然環境と遊びの連動が示され、園庭改良の検討過程を分析し、「主・客転換可能性」(有／無)とその対象(人・コト／自然環境)から四類型に分けた。最終的には、園庭改良の検討過程と保育者の意図と遊びのズレについて考察している。

キーワード：園庭改良 自然遊び 遊びの変容 主体／客体

I. はじめに

乳幼児期の子どもと保育者の関係については、「遊びが展開する中で、子ども自らが環境をつくり替えていくことや、環境の変化を保育士等も子どもたちと共に楽しみ、思いを共有することが大切である」(保育所保育指針解説, 2018, p.27)とされている。また、「驚きや喜びを人と共有する経験は、子どもが期待をもって環境に関わり、発見を楽しんだり、更にいろいろと試行錯誤してみようとしたりする気持ちを支えるものとなる」(前掲, 2018, p.153)と述べられている。さらに、「保育所における自然環境や空間などを生かしながら、多様で豊かな環境を構成し、子どもの経験が偏らないよう配慮することも求められる」(前掲, 2018)と保育士の役割が明示されている。「環境を通した保育」、「遊びを中心とした保育」といった保育の方向性が示されている。幼稚園教育要領(2017)においても、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」(p.3)として、「遊び」の重要性が共有されている。また、2023年12月には、こども家庭庁から「幼児期までの子どもの育ちに係る基本的なビジョン」の中で、「『安心と挑戦の循環』を通してこどものウェルビーイングを高める」というビジョンが示された。ここに示される「挑戦」は「遊びと体験」を通した「外の世界への挑戦」であ

り、「大人は見守り子どもの挑戦したい気持ちを受け止め、こどもが夢中になって遊ぶことを通して自己肯定感等が育まれていくことが重要」とされている。このように、子どもと保育者(大人)の関係は、遊びの世界に共に入り、体験や感情を共有することが求められる場面と、多様で豊かな環境を構成することが求められる場面がある。本報告では、後者の環境を構成する場面を取り上げ、保育者の持つ環境を構成していく視点が、子どもの遊びの展開にどのような影響があるのか検討を行う。

II. 園庭環境の構成

1. 再構築への視点

秋田氏ら(2018)は、「園庭環境に関する研究の展望」において、園庭の物理的環境と子どもの成長に関する研究を概観し、「特定の物理的環境があれば良いのではなく、多様な物理的環境から構成することが望ましい」と結論付けている。そして、物理的環境を「ひらけたスペース(広場の空間・運動スペース)」、「固定遊具」、「可動遊具・素材遊具」、「土や砂遊び場」といった14種類に分類し、先行研究から「砂遊び場や菜園は多角的に研究が進められている一方で、雑草や水遊び場、休憩や静的活動の場所などの研究が少ない」と指摘している。また、「核物理的環境がどのように子ども

の成長を支えているのか、園庭全体を捉えた研究はない」と述べている。園庭環境を再構築していく視点としては、「多様な環境」であることを押さえつつ、「動的なスペース」と「静的なスペース」との繋がり、「ひらけたスペース」と「凝集したスペース」との物理的環境のつながりと、園庭全体への視点が重要になる。河邊氏（2006）は、園庭環境の再構築の過程を詳細に記録し、分析を行っている。園庭環境の改善作業に取り組み、デッドスペースへのウッドデッキの設置を行い、遊びの変化を見出している。最初は「『遊びの場』として認識されなかった」場所が、モノを持ち込むことにより「場の見立て」がなされ、構成メンバーと共有されることにより「遊びの拠点として意味が高まる」ことを見出し、他のエリアからモノを持ち込むというつながりが「遊びを豊かにしている」と指摘している。このことから、動的なスペースと静的なスペースの繋がりという環境の構成と遊びの関係を見ていく視点が有効であるといえる。

2. 園庭という空間の構成

幼稚園施設整備指針（2022）では、「幼児の身体的発達を促すため、自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶなど幼児の興味や関心が戸外にも向くよう、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置を工夫することが重要である。その際、屋内外の空間的な連続性や回遊性に配慮することが重要である」とされている。前述の遊びの重要性が、園庭や園舎といった物理的環境の配置においても配慮されなければならないことが示されている。さらに、「幼児の自然体験を豊かにし、遊びを創造しながら心身の発達を促す」ために、「現存する森、樹木、池等や自然の傾斜、段差などを有効に活用することが望ましい」とされている。このように、園庭環境整備の視点は、自然環境と遊びの展開との結びつき（連続性、回遊性）を持ち、多様な運動経験を想定した身体的発達への期待とも結びついている。園庭の構成は、「運動スペース」、「遊具」、「砂遊び場、水遊び場その他の屋外教育施設」、「緑化スペース」、「門、囲障等」があり、これらは「指導方法、幼児の多様な活動内容や利用頻度を十分に考慮した適切な空間構成および配置を計画することが重要である」（p.27）とされている。このうち運動スペースの構造は、小学校等の学校施設における「屋外運動場」と同じように、「表面が平滑で、適度な弾力性を備え、また、適度の保水性と良好な排水性を確保する」（p.28）ことが重要であるとされている。小学校の屋外運動場では、その構造

や固定施設の使用に加え、「陸上運動やゲーム、ボール運動などの実施に支障とならないよう配置すること」とされ、体育科の教育内容に示されている運動・スポーツに必要とされる空間の確保が求められている。これに対し、幼稚園の運動スペースの特徴は、「多様な運動や遊びが誘発されるよう、敷地の形状等を有効に活用し、変化に富み、遊びながら様々な活動を体験できる空間として計画・設計することが重要である」と示されている。ここから、幼児期の遊びを中心とした運動経験における「多様な運動や遊び」の重要性が、園庭環境の整備においても共有されていることがわかる。

3. 自然環境と遊びの関係

上述のように、園庭環境整備においては「自然環境（砂遊び場、水遊び場、樹木、花壇等）」と「遊び」との結びつきが強く示されている。西村清和氏（2005）は、「遊びの中動相」（pp.24-33）を説明する際に、自然環境との関わりの例を挙げている。「遊びがある」ということを、その構造や様態において「遊隙（ゆうげき）」があり、その内部に「遊動」という往還の反復が生じていることと説明している。そして、「さざなみに反射する光」や「とんびのゆったりとした旋回」、「魚の回遊」といった自然現象は、「自然科学者がやるように、これらの現象をそれ自体として観察してみれば、そこにはただ、ある必然的法則にしたがった自然現象の一片が見いだされるにすぎない」と述べている。「風や光」、「とんびや魚」が、われわれの目に遊びとして見えることがあるのは、それらを見ている私（の目）が遊び手となり、独自の身構えを持ち関与したからであるという。そのうえで、遊び行動を「遊動の生成、現出にかかわる行動である」と定義付けている。また、ここでの「かかわる」ことについて、坂部恵の「ふれる」という感覚の説明を用いながら、「もつーもちいる」関与ではなく、主・客の転換可能性を持つ「に・

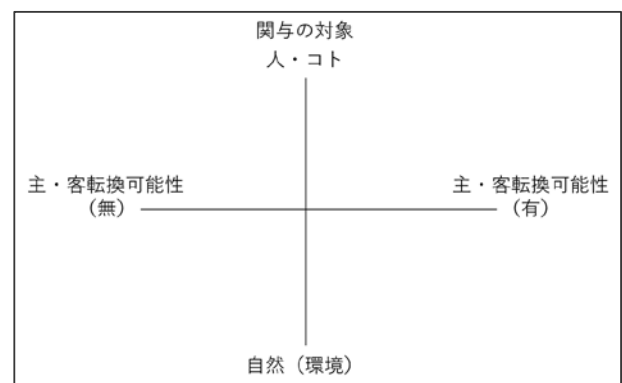


図1. 園庭再構築の検討過程の分析視点

遊ぶ」という関与であるとしている。

園庭という風景を検討していく際に、この「風景に遊ぶ」という視点が取られているのか、「もつーもちいる」関わりにとどまったものか、分析の視点として位置づけていく。

Ⅳ. 保育者の園庭改良の視点

M 保育園は、関東圏の都市部に位置する保育園で、施設の周辺は住宅街となっている。園庭に梅やクヌギ、桑の木等の樹木が配置され、その樹木間に菜園が設置されている。子どもたちは季節の野菜の苗植えから収穫までを行っている。園庭中心部は平坦な運動スペースとなっており、入園ゲートから園舎玄関までの歩道を境に、3歳未満児と3歳以上児のスペースとして設定されている。この運動スペースでは、日常の保育活動で子どもたちが自由にかけっこをしたり、曲線コースを白線で引いて三輪車遊びが行われたりしている。2024年2月に自由遊びの時間を中心に半日間の観察を行ったところ、主に周辺部分の樹木での虫探しや鉄棒運動に取り組む子どもの姿が見られた。理事長および園長にその記録を提示し確認してもらい、日常的にも同様であることが確認できた。この時点での子どもの園庭遊びは、園長によると「植物や虫の採取に興味を持つ子どもが多い」、「運動的な遊びは、ボール遊び、鬼遊びが多く、園庭の様々な場所で行われている」、「固定遊具では鉄棒遊びが不定期に見られる」というものであった（インタビュー、2023、12）。また、2023年度から広域自治体による「自然保育」認証を受け、自然との関わりを大切にしたい保育に取り組んでいる。2024年2月から、園庭の中心部に植栽スペースを新設

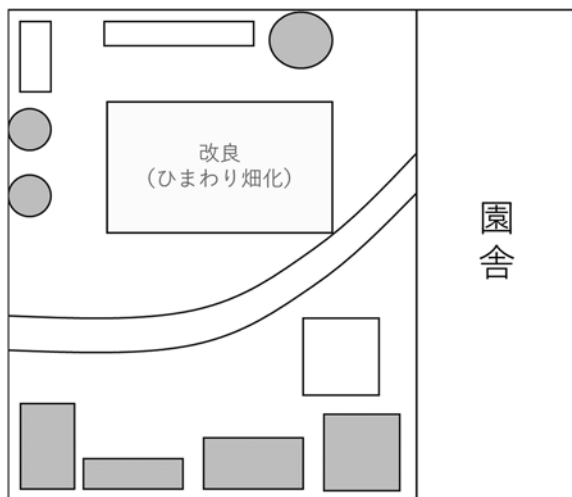


図2. 園庭の配置図

し、周辺の砂遊び場や固定遊具のスペースに回遊性を持たせるという計画を構想し、保育者間で植栽スペースの活用責任者を置いて検討を進めている。

インタビュー調査：園庭改良企画初期 2024.5

（対象：M 保育園理事長、園長）

（現状の園庭について）

01 理事長：（園庭の）土を業者に見てもらったら、この土には「何も生えない」と言われました。先代が園庭を作るときに、このような土にしたそうです。これまで見ていても、雑草が生えたことがないんですよ。

02 園 長：（小学校の）校庭の土と同じということです。深さは30センチくらいを掘り起こして、土を入れ替えます。

03 園 長：まあ、でもね、これで環境が変わると、雑草が生えてですね、なんかまた面白いことが起きて、その虫追いかけてみたいんことが始まると思うんですよ。

（ひまわりプロジェクトについて）

04 園 長：ひまわりの種はもうある程度、確保されています。もう、あちらの福島の方から届いています。何千するでしょうかね。見ると、15センチくらいで植えていきますかね。そこに2、3粒くらいの種を入れていって。15メートルっていうことは、15センチだと100列するからね。プロジェクトリーダーが、図面引いて、何粒って数えてました。年長さんの担任の先生がリーダーになっています。

05 園 長：リーダーが、ひまわりの迷路を作るって、ひまわり畑の中にいくつかの入り口と通路を作って計画しています。

（園庭改良工事について）

調 査 者：大きな、ああいうショベルカーが入った時の子どもたちの様子っていかがですか。

06 園 長：もう、（保育活動が）できませんよ、はい、できません。（トラックやショベルカーでの作業に夢中になって、他の活動ができない）2階からもよく見えるんですよ。

07 理事長：あの、子どもたちが作業者の人に言ったみたいなんですけど。子どもが保育者に交渉して、（ショベルカーの）運転席に乗せてって言ってみたいんですよ。そして、運転席の方に乗せてもらって。

08 理事長：やっぱりそういう、なんか働く姿を身近で見てると、自分もそれになりたいっていう気持ちがある、ええ。

09 理事長：まあ、やっぱり子どもって真似から入るので、そうですね。身近にそういうことをやってる大人（の姿）が結構経験になるんじゃないかな。

（畑でのひまわり栽培の過程について）

10 調査者：このベースの囲い方になれば、周りで遊べる。そうなった時に、この囲い、あの、囲いが取れて、今度は子どもたちがどこまでこう、行って、入っていいかどうか。この辺をどう子どもたちがこう、考えていくかというのも、やっぱり大切な場所で、これから花が咲いていくっていうところだと、子どもたちもやっぱり楽しみなものなので、それと中に入ってみたいっていう気持ちがある。

11 園長：どうやって心の葛藤を解決していくんですかね。

12 理事長：私が（園長を）やってる保育園では、2歳の保育園なんですけど、まあ比較的、畑を広く使っています。それこそ、まあ例えば、さつまいもみたいなのをマルチすると、ちょうどそのね、畝が歩きやすいんでしょ。みんなその上を、とととと歩いて行くんです。

V. 園庭の植栽スペースの拡大と遊びの変化

事例1) 種まきと電車ごっこ 年長クラス（12名）が畑に入り、ひまわりの種の袋から2～3粒の種を取り、あらかじめ掘られた溝に落としていく。100か所程度に種をまいていくため、途中で飽きてしまう子どももいる。種まきをしているとは反対の方へ延びる通路を、はみ出さないように慎重に歩いてみる子どもが出てくる。その子どもの後をついていく子どもが現れ、数名がつながっていくと電車ごっこが始まっていた。

事例2) ひまわり畑という園庭の断絶によるやまびこ遊び 種まき後2カ月ほど経ったひまわり畑の周辺は、まだネットにより侵入が規制されていた。ひまわりはそのネットの高さと同じくらいまで成長し、「ネットに囲まれた場所」から「ひまわり畑」として子どもに認識されるようになっていく。畑の端から、

反対側にいる子どもを見つけ、一人の子どもが「やっほー」と叫ぶ。同じ側の子どもがそれにつられ、「やっほー」と続けて叫ぶ。それに気づいた反対側の子どもも複数の子どもが同時に「やっほー」、「やっほー」、「やっほー」と続けざまに返す。これが繰り返されるうち、「やっほー」のリズムに合わせてジャンプしながらさらに「やっほー、やっほー、やっほー」と叫ぶ。

事例3) 保育者の意図と遊びのズレ ひまわりの5分の1程度が子どもの背丈の高さまで成長している。ひまわりの一本一本の間隔は途中で間引かれたこともあり、葉っぱ同士がかすかに触れる程度で、広めとなっている。（リーダー保育者が想定していた高さ、密度とは異なり、「すかすかな状態」で想定とは異なった）。畑の周囲のネットが外されると、子どもたちは恐る恐る通路の目印（ビニール紐）を確認しながら、入り口から出口を目指して歩き始める。数回繰り返すと、通路の目印には目をやらずに、ひまわりの間隔（通路）を頼りに別のルートを探して歩いている。いくつかの入り口を見つけたり、逆方向に歩いてみると、移動の動きを繰り返している。

VI. 考察

1. 園庭改良の視点の分類

園庭を改良するという具体的な計画が上がってきたのは、コロナ禍による年間行事の縮小とその影響について園内で検討されたのがきっかけである。運動会や歌の発表会といった園全体での行事を取りやめ、その準備時間や場所を系統的な保育活動にあてていきたいという方針が取られた。園庭の4分の1程度の広さを占め、中央に位置する場所に植栽を行う畑の構想が出てきたのは、子どもの「広いお花畑をつくりたい、見たい」という言葉がきっかけだった。そこから、時期や社会的意義などが検討され、「福島ひまわり里親プロジェクト」に申請し、ひまわり畑をつくるという方向性が決定された。ひまわり畑の構想において検討され、実行されてきた子どもが関わる活動内容を、「遊戯関係」において重要とされる「主・客転換可能性」（有／無）とその対象（人・コト／自然環境）の視点から分類すると以下ようになる。

- (1) 種まきの方法や栽培後の取り扱い ひまわりの種を食べる、ひまわりの種から油を搾取するというひまわりの栽培は「自然にかかわる生活活動の領域」に分類できる。
- (2) ひまわり畑をきっかけとした園庭の土壌改良 園

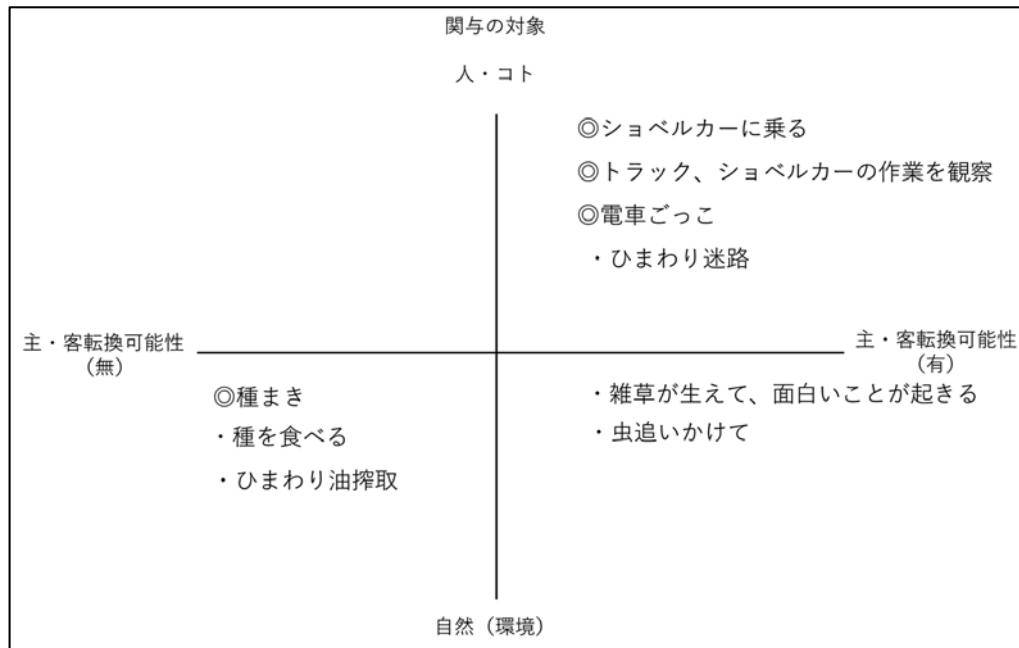


図3. 園庭改良の視点の分類 (・検討項目、◎実行項目)

庭の土壌改良が検討され、そのことにより生物多様性の場となることが期待されている(雑草が生える土壌、多様な植物と多様な生物の生息)。このような自然の多様性と子どもが関わることによる遊び(「面白いことが起こる」)の創出についても言及されている(「自然の風景に遊ぶ」領域)。

- (3) ひまわり迷路の試み リーダーの保育者は「ひまわり迷路」をひまわりの障壁を使って作ろうと試みている。実行された行為としては、園庭改良の作業(トラックやショベルカー)に子どもの興味が向き、ショベルカーへの乗車(運転手になりきる)という遊びが見られた。また、種まき時に子どもが「通路」に気づき、連なって移動する電車ごっこも見られた。これらは「人の役割(コト)を遊ぶ領域」に分類できる。
- (4) 日常生活における人・コトとの子どもの関わり 組織や役割づくりの領域においては検討がなされなかった。

2. ひまわりの成長と遊びの変化

事例1) 種まきの際、子どもたちは新しい土が敷かれた園庭で、電車ごっこを始める。それは畑の枠組みとして設置されたビニール紐の連続性を見つけ、「通路」に気づいたことによるものである。子どもにとっては区切られた園庭の一部に過ぎない。これまでも園庭に白線が引かれ、その上を走ったり、三輪車で電車ごっこをしたりする姿が見られていた。

事例2) 2カ月が経つ頃には、ひまわりは子どもの背の高さに近い(100～150cm程度)ところまで成長している。外周のネット(100cm)と合わせて、園庭の中央に位置する「ひまわり畑」として認識され、「こちら」と「あちら」を隔てる自然環境として認識されている。「やっほー」という発声は通常、「やまびこ」という山や谷にぶつかって反射する現象を楽しむ方法である。ひまわり畑を挟んで一人の子どもが発声した「やっほー」が、こちらとあちらの子どもたちに同調的に広がったのは、園庭を隔てる「ひまわり畑」という自然環境との関わりが共有されたことによるものである。子どもが同じ発話をすることは、「言葉の意味を伝えることではなく、唱える行為そのものに心地よさや楽しさがある」(砂上, 2024)ということだ。「やっほー」という発声とリズムカルなジャンプという身体性の共有は、「ひまわり畑によって隔てられた」自然環境との関わりによってもたらされたといえる。

事例3) 当初、保育者は「迷路」の障壁としてのひまわりの壁を想定していたが、「すかすかな状態」で実現できなかった。しかし、子どもは「すかすかな状態」のひまわりの脇を抜け通り道を見つけ、何度も走り抜けている。速さを競うわけでもなく、誰かの後ろを離れないようについていくこともあれば、自分一人でこれまでとは違う道のりをたどって通り抜けたりもする。ひまわりの茎や葉は、子どもが走り抜けたり、潜ったり、風が吹くたびに揺らぎ、様々

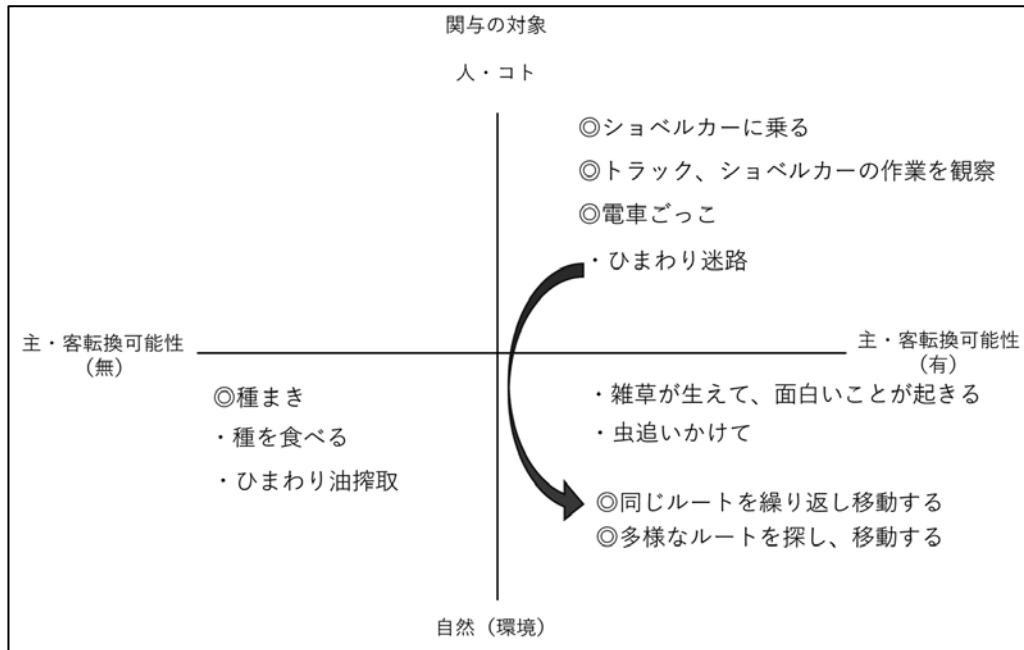


図4. 保育者の意図と遊びのズレ（・検討項目、◎実行項目）

な形（隙間）を見せている。ここにひまわりという自然と関わり、ひまわりの道をすり抜けるという能動的な動きとひまわりの隙間に誘い込まれるという受動的な動きの現出を見ることができる。

VII. まとめ

本報告では、園庭改良の検討過程を分析し、「主・客転換可能性」（有／無）とその対象（人・コト／自然環境）から四類型に分けた。検討段階では、自然との関わりが生活活動と遊びの側面双方で検討されている。準備・初期の段階では、遊びの側面において人・コトに関わるごっこ遊びが現れ、ひまわりの成長段階では、想定されていなかったひまわりとの関わり（隙間を見つける－通り抜ける）が遊ばれていた。今回取り上げた検討内容（言説）は、理事長、園長、リーダー保育士という一部のものである。また、子どものひまわり（畑）との関わりについても、行為を解釈するにとどまっている。今後は、保育者の様々な意見の集約過程についても情報を整理することで、園庭改良という環境構成への期待を細分化できると考えている。同時に、個別の自然（環境）との関わりの現象を、子どもの語りも合わせて分析することが今後の課題である。

参考文献

秋田喜代美, 辻谷真知子, 石田佳織, 宮田真理子, 宮

本雄太, 園庭環境に関する研究の展望
『東京大学大学院教育学研究科紀要』第58号, 2018, pp.495-533
河邊貴子, 園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開－ウッドデッキの新設をめぐる－, 『保育学研究』第44巻第2号, 2006, pp.139-149
厚生労働省, 保育所保育指針解説, 2017
久保健太, 遊びの語り方を変えよう－中動態としての遊び－, 佐伯胖編著, 子どもの遊びを考える, 2023, 北大路書房
文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部, 幼稚園施設整備指針, 2022
文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部, 小学校施設整備指針, 2022
西村清和, 遊びの現象学, 2005, 勁草書房
砂上史子, 遊びにおける同型的行動と仲間関係, 発達178, 2024, ミネルヴァ書房
厚生労働省, 保育所保育指針解説, 2018
文部科学省, 幼稚園教育要領, 2017
こども家庭庁, 幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン, 2023